第五講 「論理的読解」総復習

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

「イメージ」とは何か。一般には、何かあるものを再現表象するのがイメージだと考えられよう。しかし私が考察したいのは、実在するものの形を写し取ったものというより、むしろ絶対的に失われたもの、「不在」そのものを表象したものといえるかもしれない。神によりこの世に送られたキリストは、かつて人として地上に存在したのだとしても、存命中の彼の顔かたちを写したイメージは存在しない。昇天後、その身体は失われ、この世の終わりに再臨するときまで、人は彼の姿を知りえない。とすれば「キリストの顔」を描いたイメージとは、オリジナルなき表象、「不在」それ自体の　Ｉ　といってよいだろう。

そうはいっても、キリストをかたどる絵画や彫刻は世界中に溢(あふ)れかえっているではないか――そう訝(いぶか)しむ声もあるにちがいない。それは確かだ。しかしこうした造形物の背後には、現世の人間の目には捉えがたい神的存在を形にするための論理と努力の歴史が横たわっている。偶像を否定するユダヤ教を母胎とするキリスト教にとって、イメージの制作や崇敬が擁護

されるには、乗り越えねばならない課題がいくつも存在した。聖なるものの不可視性や表象不可能性に挑んだ芸術家たちの営みは[1]タキにわたる。

たとえば、「私は世の光である」（「ヨハネによる福音書」）という隠喩に基づいて、キリストを青白い光源や太陽に擬（なぞら）えて描いたり、光り輝き刻々と変容するその顔の不可視性を、芸術家の技ではなくガラスや金箔といった材質（メディウム）の力で示したり、あるいは現世における限定された「見神」を暗示して、キリストの顔を影のごとく暗く描くといった工夫などが思い起こされる。神を拝もうとするものを「アポスコペイン（遠くを見やる視線）」とともに描くことで、その絶対的距離、次元の違いを示す場合もあれば、ジョットの描いた天使たち（バロンチェッリ祭壇画チマーザ部分、サンディエゴ美術館）のように、神の輝きを直視できず鏡越しに近づこうとする表現も意味深い。[A]神的存在は、見ることの限界、表象の閾（いき）に宿るのだ。

［ a ］目にしえない、あるいは目にしてはならないものを見えるものにするというイメージのパラドクス。それはイメージの展示や演出とも無縁ではない。聖なるもののイメージは、見えるものとして造形化されたにもかかわらず、メデューサさながらときに目にしたものを失明させたり、天変地異を引き起こしたりすると考えられた。それゆえ、聖龕（タベルナクルム）（聖なるものを収める容器）やヴェールで覆い隠され、不可視のまま、ただそこに

存在するということだけが暗に示されることがある。あるいは、見るものに眩暈（めまい）を引き起こすようなまばゆい額に挿入されて、像そのものは暗く[2]コウタイし判別しえないかたちで示された。

［b］十九世紀に大学制度のなかに生を享（う）けた美術史学が、芸術的価値をそなえるとされる作品をカント的な距離をもって客観的に分析することに心を砕いてきたとすれば、鑑賞者の心理や受容様態をも巻き込むイメージの問題は、ときに考察対象から逃れかねず、それらを十分に理解するには困難をともなう。芸術家の技巧を拒み、キリストの身体の「痕跡」に起源するアケイロポイエトス・イメージ（人の手によらない表象）や、それを忠実に複製することに意味をもつ「作者不詳」のイコンのあり方は、近代以降の「芸術」や「芸術家」という概念を前提にしていては理解することができない。しかも奇跡を起こし、信者を慰安し、ときには威嚇さえする、いわば［Ⅱ］イメージにアプローチするには、あらたな視座が求められよう。

　こうした対象に近づくために、私は、歴史人類学、あるいはイメージ人類学と称される研究動向へと視野を開くことにした。一九七〇年代頃から、西欧社会の価値体系や組織形態の相対性が認識されるにつれて、歴史学では、民族学（エスノロジー）や民俗学（フォークロア）、社会人類学や文化人類学のアプローチを参照しよう

とする傾向が高まり、それらとの対話に[3]リッキャクする「歴史人類学」と称される新たな方法論が模索されてきた。たとえば、中世史家ジャン＝クロード・シュミットは『中世歴史人類学試論』のなかで次のように述べている。

> 歴史家が儀典上の表象ないし慣行を理解しようとする場合に、中世ヨーロッパの神の表象に関連して、そもそも「宗教」という観念そのものは正しいのか。今日われわれが定義するような意味での「宗教」の観念は、われわれの文化が考え出した比較的新しい産物なので、十八世紀の啓蒙思想の時代より以前に遡ることはない。むしろ、人類学者のように象徴体系について語るほうがよい。それはつまり、一社会の表象と実践の全体に行き渡っている信念や神話や儀典のことで、今日われわれはそれらのあいだに[B]「経済」や「社会」あるいは「宗教」を識別する傾向が強いのだが、それこそ時代錯誤にほかならない。

[c] こうした議論を、美術史学における「芸術」の概念にあてはめても、あながち見当違いではないだろう。私が注目している多くの作品は、近代以降に遡及的に再定義された「芸術」という観点からは見過ごされかねないのだ。

さらにシュミットは、「人類学」という言葉で、[C]自らの文化の慣習と

価値から距離をとり、対象を理解するにふさわしい語彙や観念を意識的に探究する態度、しかも、個々の現象を、その内容ではなく、多くの表象と象徴的な行為の体系や諸関係を捉えることと考えている。つまり、「人類学的分析とは、身体、所作、象徴的器物、図像、祭儀の時や場が単に思想や神話を表現するのみならず、それらを組織し、存在させもする様態を解明する」ものなのだ。さらに作品とそれを取り囲む空間、そして受容者の反応も視野に入れて、[D]イメージが息づいていた場の様態そのものに目を向けることへも導かれるだろう。

[d] 歴史学のこうした動向と並行して、美術史学においても、自らの学問領域を客観視すべく、従来の学の前提を問い直し、隣接諸分野との領域横断的な対話を重視する傾向が高まりをみせた。素朴な実証主義や歴史主義を反省し、「中立で透明な主体」、「自律的な作品」という「近代」的な認識図式や西洋中心主義的な価値観が見直され、[Ⅲ] 反省を自らに課す動きがみられはじめたのだ。

[甲]

なかでも、狭義の「芸術」という概念を超えて、さまざまな文化におけるイメージ一般の価値や機能や力を捉え直し、像単体ではなく、受容者とのあいだで紡がれるインタラクティヴな関係や受容空間も視野に入れたイメ

ージ人類学的研究が囁（ささや）かれはじめる。社会的過程、礼拝儀礼、交換のメカニズム、神話の自己叙述をめぐる研究など、人類学が構築してきた概念は、イメージ（必ずしも芸術作品に限定されない）がいかに制作者や受容者に何らかの意味や力を伝達するようコード化されているのかを構造的に理解する可能性へと導いた。

（水野千依著『キリストの顔――イメージ人類学序説』による）

問一　空欄［Ⅰ］～［Ⅲ］に入る最も適切な語句を、それぞれ次の中から選び、解答欄に記入せよ。

Ⅰ　イ　理想化　　ロ　抽象化
　　ハ　現前化　　ニ　象徴化

Ⅱ　イ　「歴史」に根付いている　　ロ　瞬時に「変容」を繰り返す
　　ハ　「重量」感に満ち満ちた　　ニ　「生ける」存在としての

Ⅲ　イ　意味論的　　ロ　方法論的
　　ハ　超越論的　　ニ　解釈論的

問二　次の一文が入る最も適切な箇所を、本文の空欄［a］～［d］の中から選び、解答欄に記入せよ。

このように聖なるもののイメージについて考えを巡らそうとすれば、わたしたちは、自ずと従来の伝統的な美術史の枠では捉えがたい現象と向き合わざるをえないことになる。

問三　傍線部A「神的存在は、見ることの限界、表象の閾に宿る」の説明として最も適切なものを次の中から選び、解答欄に記入せよ。

イ　神的存在は、対象をそのまま写し取るというあり方を超えた、不在を表象しようとする場から生まれる、ということ。

ロ　神的存在は、何かを見えるように形象化する古典的な概念を壊すために、絶対的距離を伴って描かれる、ということ。

ハ　神的存在は、見てはならないものを表現するときに初めて現れるため、そこで用いられる材料が重んじられる、ということ。

ニ　神的存在は、見ることのあり方に再考を促し、世界を複雑で多様性に満ちたものとして提示する働きを持つ、ということ。

問四　傍線部Ｂ「「経済」や「社会」あるいは「宗教」」は何によって支えられているか。それを示す十字以上十五字以内のひと続きの部分を、傍線部Ｂより前の本文から抜き出して、解答欄に記せ。

問五　傍線部Ｃ「自らの文化の慣習と価値」の説明として最も適切なものを次の中から選び、解答欄に記入せよ。

イ　一定の型にはまった概念や思考の枠組

ロ　人間の精神に根差した普遍的な心の姿

ハ　文化は人間が作り出すと考える合理的な思考

ニ　それぞれの時代を反映した明快な文化特性

問六　傍線部Ｄ「イメージが息づいていた場の様態」の説明として最も適切なものを次の中から選び、解答欄に記入せよ。

イ　歴史のなかの一場面をイメージし体系化する思考法

ロ　表面的な現実に潜むイメージを生み出す機能

ハ　限りなく変容するイメージがあらわす世界の多様性

ニ　世界がイメージに満ちているという奥深い世界像

問七　次の三つの文を正しく並び替えて空欄［甲］に入れるとき、二番目に来るものはどれか。最も適切なものを選び、解答欄に記入せよ。

イ　さらに古典的な美的ヒエラルキーに基づく研究対象の措定が疑問視され、現代芸術をも射程に入れたさまざまな時代・文化圏の造形物を相対的に捉え、作品を媒介するメディアやテクノロジーの問題も注目された。

ロ　新しい美術史研究のモデルが人類学や社会学に求められ、社会的・文化的コンテクストにおけるテクスト＝美術作品のあり方を問う視点が前景化する。

ハ　加えて、作品よりも、作品記述や解釈といった美術史の言説自体を問い直すメタ美術史的研究も進められた。

問八　次の中から本文の論旨に合致しないものを二つ選び、解答欄に記入せよ。

イ　「見えないもの」と「見てはならないもの」という性格を分析することで、単なる再現行為によって生まれる平板的なイメージを超える、新しい意味あいが明らかになってくる。

ロ　イメージの枠組を固定したものでなく、その輪郭を押し広げる形で考えていかないと、イメージの現代性は理解できない。

ハ　キリストの図像研究を新しくするためには、図像のさまざまなパターンを数多く集め、その関係性を明らかにすることが必要である。

ニ　生命を付与され、力をそなえた存在として、イメージを新しく捉え直すことが大切である。

ホ　現代注目すべきイメージは、その中心的な実体というより、歴史的・社会的な反映である付属物の存在によってこそ支えられているはずである。

問九　傍線部1～3のカタカナの部分を漢字に直せ（漢字は楷書で丁寧に書くこと）。

（次ページより解答欄）

問一

Ⅰ

Ⅱ

Ⅲ

問二

問三

問四

問五

問六

問七

問八

問九

1

2

3

巻末資料　読解法一覧

読解法1　「文の構造」

文を読むときは「主部と述部」「修飾部と被修飾部」「接続部と文」という文の構造に気をつけよう。

《分析記号》
〈主部〉（＝とんがりカッコ）
［修飾部］（＝四角カッコ）
接続部　／（＝スラッシュ）　文

読解法2　「指示語・接続表現」

文を読むときは「指示語」と「接続表現」に気をつけよう。「指示語」があれば「指示内容」を捉え、「接続表現」があれば「前後のつながり」に注意する。また、本書では「論理的なつながり」を強調するため、「接続詞」「接続語」ではなく「接続表現」という表記で統一する。

《分析記号》
「指示語」　＝　○で囲む
「接続表現」　＝　○で囲む

「指示語」のカテゴリー

①「指示語」

前の名詞や説明を指す。

「これ」「それ」「あれ」指示語（指示代名詞）
「この」「その」「あの」指示語（指示連体詞）

②「一般化の指示語（まとめの指示語）」

前の具体例や詳しい説明をまとめる働きがある。指示内容は前に書かれている説明を幅広く捉える必要がある。

「このような」「そのような」「こういう」「そういう」

「接続表現」のカテゴリー

①「解説」

前の語や文や段落を詳しく説明したり、要約的にまとめたりする。

「つまり」「つまるところ」「すなわち」
「要するに」「畢竟」「結局」
↓要約的な言い換え
「言い換えれば」「換言すると」
↓言い換え
「言わば」
↓改まった表現（比喩表現・個人言語）への言い換え

②「例示」

前の内容の具体例を引いたり、一部を強調したりする。

「例えば」「言ってみれば」
↓読者の理解のための具体例をひく
「とりわけ」「なかんずく」
↓全体の中から一部を取り出して強調する

③「理由」

前の文に対する理由を説明する。

「なぜなら」「というのは（も）」　↓　評論文に多い
「けだし」「だって」　↓　小説文・随筆文に多い

④**「帰結」**

前の文からの結果・結論を示す。（順接が多い）

「だから」「したがって」「それゆえ」
「ゆえに」「よって」「それで」
「そこで」「すると」「そして」
（因果関係がない場合もある）

⑤**「転換」**

前の主張や主題を転換する。

「しかし」「だが」「ところが」「とはいえ」「さりとて」
「それでも」「それなのに」「それにしても」「けれども」
「けれど」
↓「主張」の方向転換（逆接）

「さて」「ところで」「閑話休題」
↓「主題・話題」の転換

⑥「付加」

前の内容に別の内容を付け加える。

「さらに」「しかも」「そのうえ」「加えて」
「また」「および」「かつ」
「だけでなく」「のみならず」
↓単純な付け加え

「一方、他方」「もう一方で」「他方で」
↓対照的な内容を付け加える

⑦「補足」

前の内容と反対の内容を補足する。

「ただし」「もっとも」

⑧ **「選択」**

前の内容と後の内容のいずれか一方を選択する（両方の場合もある）。

「または」「あるいは」「もしくは」「ないし（は）」「それとも」

読解法3　「文の関係」

文を読むときは「同値（イコール）」「対立」「因果」「包摂（抽象具体）」という関係に注意する。「文の構造」「指示語」「接続表現」といった形式、および「言葉の意味」といった内容の両面から「文の関係」を捉える。

《分析記号》

① **「同値関係」**　A ＝ B
② **「対立関係」**　A ↔ B
③ **「因果関係」**　A → B
④ **「包摂関係」**　A ― a’

読解法４　「レトリック（説得話法・修辞法）」

筆者は自分の主張を理解してもらうだけでなく、納得してもらえるように様々な方法を用いて工夫をしている。その工夫が「レトリック（説得話法）」である。文を読むときには「レトリック」に気をつけよう。

①「問題提起」

読者に疑問を投げかけて意識を誘導し、答えとして自説を述べる。「疑問文」があったら、そのあとに「答え」が来ることを予想しながら読もう。

《分析記号》　波線（？）をひく
「疑問文（？）」→「◎答え（自説・持論）」

②「具体例」「体験談」

読者がイメージしやすいような例をあげる。また、実感を込めるために体験談をあげる。これらは筆者の主張を伝えるための手段なので、（丸カッコ）で括りながら常に「筆者の主張」を意識して読もう。

《分析記号》（丸カッコ）で括る（具体例）
「◎主張」→（△具体例、体験談）（具体例）→「◎まとめ」
抽象　→　具体　→　抽象

③「引用」

筆者が別の文章の筆者と対話しながら文章を展開することがある。二人で議論を進めることにより、論を深めるためである。

引用は筆者の主張に対して「同意見」「反対意見」「根拠」「具体例」となるものがある。引用も（丸カッコ）で括りながら読んでいこう。

> 《分析記号》（丸カッコ）〈引用〉で括る
>
> （△〈引用〉引用）→「◎筆者の説明・解釈」

④「比喩」

内容のイメージを喚起しやすくするために別のものに喩える。

> 《分析記号》□で囲む
>
> 「直喩」＝「ような」「みたいな」をつけて喩える
>
> 「隠喩」＝「ような」「みたいな」をつけないで喩える
>
> 「擬人法」＝人でないものを人に喩える
>
> 「類比」＝同じグループ内の別のものに喩える

⑤「譲歩」

一般論や反論に一旦は理解を示しながらも、方向転換をして自説・持論を展開する。譲歩も（丸カッコ）で括りながら読んでいこう。

《分析記号》（丸カッコ）で括る
（「確かに」「もちろん」「なるほど」「むろん」→△一般論・反論）
「しかし」「だが」「けれど」→◎自説・持論

読解法5　「論理フレームワーク」

筆者は自分の伝えたい内容を定義・整理・分類することで、内容を正確に相手に伝えようとする。あらゆる筆者に共通する整理の仕方が「フレームワーク」である。内容を正確に掴むためにも「論理フレームワーク」に注意しよう。

《分析記号》　○　で囲む

①「否定」のフレームワーク

Aではなく、（ではない。）Bである。
Aより（ではなく）むしろB。
Aのようで実はB。

※AとBが反対の内容になる場合が多い。
※Bに筆者の主張が来ることが多い。

②「条件法」のフレームワーク

AならばB（AはBである）。
Aの条件（前提、本質、基本）はBである。
Aは常に（必ず、絶対）B。
すべてのAはBである（全称文）。
AのためにはBでなければならない。
（AのためにはBである必要がある）。
BでないならばAでない。
B以外にはAはない。
Bのときのみ（だけ、に限り）A。

Bしてはじめて（してこそ）A。

※主張（命題）を表す。
※Aは十分条件、Bは必要条件を表す。
※「AならばB」の否定は「Aは必ずしもBとは限らない」である。
「AであってBでない」ような「反例」が挙げられる。

③「連言」のフレームワーク

AかつB。
Aさらに、そのうえ、加えて、B。
Aだけでなく、（だけではない。）Bも。
Aのみならず、Bも。
Aと（や）B。
Aつつ、ながら、同時に、ともに、B。

※Aという主張とBという主張が同時になされている。
※「AかつB」の否定は「Aでない、またはBでない」となる。（ド・モルガンの法則）

④「選言」のフレームワーク

AまたはB。
AあるいはB。
Aもしくは、B。
Aないし（は）B。
Aか（や）B。

※AというかBという主張のうちどちらか一方（または両方）がなされている。
※「AまたはB」の否定は「Aでない、かつBでない」となる。（ド・モルガンの法則）

⑤「差異（対比）」のフレームワーク

AはXであるのに対し、BはYである。
AはXであるのとは異なり（違って、別に、逆に）、
BはYである。

※AとBの相違点を説明する。
※XとYは反対の内容になる場合が多い。

⑥「変化」のフレームワーク

Ａから Ｂへと変化する。
Ａだったものが Ａでなくなる。

※ＡとＢは反対の内容になる場合が多い。

⑦「類似（類比）」のフレームワーク

ＡはＸである。Ｂも（また）Ｘである。
ＡとＢはともにＸである。
Ａと同様にＢも（また）Ｘである。
ＡとＢはＸという点で同じである。

※ＡとＢの共通点を説明する。

⑧「逆説」のフレームワーク

Ａすると、かえってＢ。
Ａと同時にＢ。

※ＡとＢは反対の内容になる。
※一見矛盾しているように見えるが真である。

⑨「因果」のフレームワーク

Ａだから Ｂ。
Ａなので Ｂ。
Ａによって Ｂ。
Ａのため Ｂ。

※ＡとＢに因果関係がある。

読解法6　「論証」

筆者は自説を主張するが、その主張は読者にとって飛躍があったり、常識に反する内容であったりする。そこで、筆者は読者に納得してもらうために「論証（証明）」を行う。その「論証」を読むために「論証のフレームワーク」に注意しよう。

①単純な論証

A（○根拠）→B（◎結論）

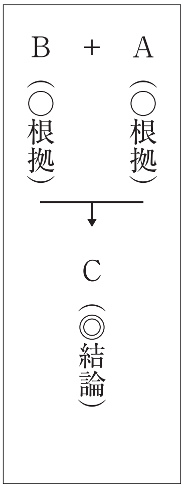
※根拠Aから結論Bが導かれている。

②論証の連鎖

A（△根拠）→B（○根拠）→C（◎結論）

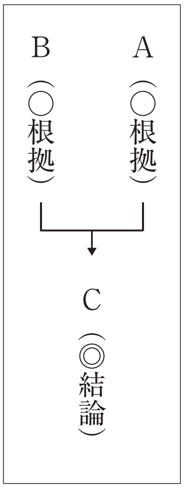
※主張Aが根拠となって主張Bが導かれ、その主張Bが根拠となって主張Cが導かれる。

③結合論証



※主張AとBが組み合わさって一つの根拠を形成し、主張Cが結論付けられる。
※AかBかどちらか一方がもしないならば、この論証は成立しなくなる。

④合流論証



※根拠Aだけでなく根拠Bもあり、結論Cが導かれる。
※AとBはそれぞれ単独でも根拠になる。

読解法7　「心情」

小説文や随筆文では登場人物や作者の「心情」が問われます。「心情」を捉える際にはその心情が発生する「原因」まで捉える必要がある。そこで、「心情」を捉えるための「因果関係」を「心情」のフレームワークとして覚えよう。

①単純な心情

原因	↓	心情	↓	結果
（事態、事情）				（行動、反応、発言）

※「心情」部分が書いてない場合は「原因」と「結果」から推測する。

②心情の変化

変化
心情A　↓　心情B
→　変化の原因

※心情Aから心情Bへの変化を捉える。
※心情Aと心情Bは反対のものになる。
※「心情A」「心情B」「変化の原因」の三点を捉える。

③結合原因の心情

原因A（外的）
＋
原因B（内的）
↓
心情
↓
結果

※「原因A」と「原因B」が組み合わさって「心情」が発生する。
※「原因B」は特殊事情であることが多く、「セリフ」「心中文」「過去のシーン」によって明らかになることが多い。

④心情の交錯

原因A → 心情A
＋
原因B → 心情B
→ 結果

※「心情A」と「心情B」が同時に存在する。
※「心情A」と「心情B」のそれぞれに「原因」がある。
※「心情A」と「心情B」は相反する心情である場合が多い。

第五講「論理的読解」総復習　解答

問一　Ⅰ　ハ　Ⅱ　ニ　Ⅲ　ロ

問二　b

問三　イ

問四　西欧社会の価値体系や組織形態

問五　イ

問六　ロ

問七　イ

問八

ハ
ホ

問九

1
多岐
2
後退
3
立脚